

小島鳥水と山の紀行文-三つの山旅をめぐって-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯田, 年穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/8131

小島烏水と山の紀行文

— 三つの山旅をめぐる —

飯 田 年 穂

1902 (明治 35) 年の夏、それまで抱きつづけてきた槍ヶ岳登山の企てを、ついに成就した小島烏水は、山と対峙するおのれの心に想いをいたしながら、こう書いた。

「草鞋^{わらぢ}の緒はかくして結ぶものぞと、手を取りて教へられてより今に至りて十年、人と為^なりては須^{すべから}く鎗ヶ嶽^{くつきやう}の如く倔強^{くつきやう}ならざる可らず、文を作りては又須^{すべから}く鎗ヶ嶽^{くつきやう}の如く骨力^{きうりくわう}崢嶸^{きうりくわう}ならざる可らずとおもひぬ」¹⁾

ここには、山と人と文の三者を人格的な連関において捉えようとする意図をもって、山に向き合う烏水の姿勢が見られる。こうした心象描写については、一般的に、壮大な自然を前にした時にしばしば見られる感情移入的な表象との親近性を指摘することも、たしかに可能ではあろう。しかし、烏水の場合、単なる情緒的感傷的表象にとどまらない、鮮烈な自己意識の発露があることも見逃してはならない。

このあと、彼は、槍ヶ岳を富士山と対比しつつ、こう続けている。

「他は圓錐にして彼は尖錐なり、吾性素^{もと}より尖を愛す、他は婉容^{えんよう}にして彼は冷峭^{れいせう}なり、我は冷やかなるものに参して初めて醒^さむるの快きをおもふ、富士は詩に入り畫に入りたれど、彼は只^{ただ}天上の光線を浴びて白

描せられ、混沌たる雲霧に刷かれて黒寫さるゝのみ、彼の影は紙に落ちず、筆に載らず、只だ宇宙の或一點にあやしげなる弧線を結びつけて、千萬年の後、之を説き得る天才の現ずるを俟つ」²⁾

すでに富士は、多くの人間によって、絵に描かれ文に書かれてきた。それに対して、槍ヶ岳を扱ったものは、その当時、まだほとんどなかった。それは、何よりも、槍ヶ岳に登るひと自体が、まだほとんどいなかったことによる。烏水の槍ヶ岳登頂は、日本の近代登山の黎明期における登山活動の中でも、まさしく日本登山史の門出を飾る記念碑的な業績であったし³⁾、その記録たる「鎗ヶ嶽探險記」は、日本人登山者の手になる最初の槍ヶ岳紀行としての価値を有している。

そうしてみると、「鎗ヶ嶽探險記」での烏水の書きぶりからは、おのれを「之を説き得る天才」に重ね合わせつつ、我こそ、槍ヶ岳を描きうるにふさわしい、最初の紀行文家たらんとする矜持をもって筆を執った烏水の姿が、浮かび上がってくるはずである。

このようにして、烏水が描く槍ヶ岳の紀行は、それまでの富士の場合のような伝統的紀行文とは、異なった表現のスタイルが求められる必要がある。それは、まずもって山自体のもつ特性と、その山に向かう人間の志向そのものの違いから来るといべきであり、その違いとは、まさしく、「圓錐」の富士山と「尖錐」の槍ヶ岳という、ふたつの山の形の違いにこそ、端的に表象されているといつてよいであろう。

「鎗ヶ嶽探險記」の冒頭、烏水はこう書き始めている。

「余が鎗ヶ嶽登山をおもひ立ちたるは一朝一夕のことにあらず。何が故に然りしか。山高ければなり。山尖りて峻しければなり」⁴⁾

これまた、富士に代表されるような「講」を組んでの信仰登山に見られる、

伝統的な登山形式とはまったく異なった登山のスタイルが示し出されている。すなわち、純粹に〈高み〉に挑む企てとしての登山であるが、それは、近代西欧の精神性に裏打ちされたアルピニズムの系統につながるものと考えることができよう。

アルピニズムと呼ばれる、自然の一部をグランドとして実施される、人間の山に登るという活動形態は、それ自体が、誕生の地たるヨーロッパでもまだ新しく、明確に近代としての性格を帯びたものであった。当時の日本は、まさしく西欧近代の波に突如として投げ込まれた状況にあり、この、近代化への歩みを一步踏み出したばかりの時代は、鎖国期をとおして培養されつづけてきた日本型精神性が、あからさまに西欧と対峙することによって、いやおうなしに変容を迫られた時期にあたっている。近代の意識を吹き込まれたばかりの日本人は、西欧の近代化が孕んでいたさまざまな問題性に、まったく無自覚的にさらされることになった。その結果として、近代の歴史的意味が、日本人としての精神性の中で整理・消化されることのないままに、〈西欧的なもの〉を、いわばひとつのお手本、ないしモデルのかたちで受容し、ただちに模倣的实践へと突き進むという段階に入っていったのであった。

明治期からはじまる、近代アルピニズムの受容の経緯は、日本人の精神性における自然と人間の関係の変容を映し出す、近代日本精神史の局面のひとつであり、そこにかかわるさまざまな事例のなかでも、とりわけ凝縮された具体的な表象によって、その消息を鮮明に表現しているといつてよい。このような時期にあって、日本における近代的登山の創始者の代表的なひとりに小島鳥水があり、鳥水の書き残した多くの文章は、そうした変容の過程をたどるための手がかりを提供している。

したがって、そこで鳥水が目指していたものとは、アルピニズムという領域における、西欧近代の受容の実践と、アルピニズムの行為を表現しうる紀行文の可能性の探究であったと見られうるのであるが、このような新しい精神性の位相に立った紀行文のスタイルは、それまでの山水趣味的な紀行文に

比較して、表現のパラダイムそのものの変換が求められざるをえない。すなわち、鳥水にとっては、彼自身はその涵養を受け親しんできた漢文的な山水趣味からの脱却を迫るものにほかならなかった。

「鎗ヶ嶽探險記」は、新しい表現のスタイルを求めて模索を続けてきた鳥水の、その時点での成果を世に問わんとしたものであろう。槍ヶ岳登山にいたる来し方の「十年」を振り返る彼の眼には、それまでたどってきた道行きの歷程と、そのさきに指し示された、新たな行く末の情景が見え始めてきていた。

ここでは、「鎗ヶ嶽探險記」に到達するまでの、〈アルピニスト〉小島鳥水を準備し、アルピニズムの紀行文の可能性を模索した鳥水の、山とのかかわりの消息と、それに伴う文章修業の経緯について、具体的な三つの山旅を中心に考察してみる。

烟霞の癖——青年期の旅と文——

鳥水は、本格的に山に登るようになる以前から、すでに文筆に対する旺盛な関心を見せていた。それは、当時の少年文芸雑誌へ15歳の頃より投稿を始めたことに端的に示されているが、おそらくは、文芸評論のような領域に主要な活動の場を求めて、とりあえず最初は、当時の文壇状況をにらみながら、さまざまなジャンルにわたる文章を書き始めたもののように思われる。その試みの中から、紀行文家として頭角を現わしてくるわけだが、その過程で実際の山旅がなされており、そうした山旅の経験と、それを表現するものとしての紀行文とが、相互的に関連しあいながら、アルピニストとしての鳥水を形成する方向に収斂していく。それは、内実についていうならば、自然を見る眼を鳥水がいかに獲得していったかにかかわることであり、自然と向き合う人間のありようを、その時代の文化状況の中に定位させていくための、新たな地平を開き出すものにほかならなかった。

小島烏水（本名、久太）が生まれたのは、1873（明治6）年12月29日のことである。没落士族の長男であった烏水は、父が横浜税関吏の職を得たことにより、当時すでに開港地の賑わいを見せていた横浜で生活を送るようになった。東京から移り住んだ明治初期の頃は、山王山と呼ばれた彼の家周辺には、まだ「森林といふ原始の自然」が残っていて、その自然の佇まいが、幼き烏水に与えた影響はけっして少なくなかったと思われる。とりわけ、富士、丹沢、箱根などの、山の景観に強く心惹かれたことを、彼自身繰り返し述べている。しかし、すでにそこにも、都市化の波が迫ってきており、都会の巷の「悪の華」に次第に侵食されるようになっていったが、このことが、烏水の都会嫌いの性格を育てていったことも否定できまい⁹⁾。

下級官吏の貧窮の中で、かろうじて横浜商法学校（後の横浜商業学校）に進学した彼は、卒業後、商社勤務などを経て、1895（明治28）年に横浜正金銀行に入行、以後、銀行員を生業としてその生涯を過ごすことになる。彼が、後に「余は小學校を卒業せるころより故ありて讀書の人となるを許されず、遂に丁稚となり、家僮となり、今や算盤の人となり了す」¹⁰⁾と書いていることから見ても、それは、おそらく厳しい生活状況によって強いられたものだったのであろう。だが、それはまた、大学進学を果たした親友に比較する時、「余慚恚血を溺せり」¹¹⁾というまでの悲痛な叫びを挙げずにいられなかった烏水であつたればこそ、彼の文芸に対する渴望にはやみがたきものがあったことが想像される。

少年久太の投稿文が初めて雑誌「少年文庫」第一集に掲載されたのは、1889（明治22）年、まだ横浜商法学校在学中の15歳のときであった。そのあと、引き続き「少年文庫」（のちに「文庫」と改題）、「少年園」、あるいは同人誌「學燈」といった雑誌に、久太は文章を発表していくようになる。いわゆる文才には恵まれていたようで、漢文調をよくこなし、きらびやかに漢語をちりばめた美文に筆をふるう久太を評価して、「文庫」の記者のひとり河井醉若は、「曰く菊池海城、曰く関清村、曰く小島久太、皆之れ本誌上の

新勇将」と称讃している⁸⁾。

初掲載の「雨夜友ヲ懐フノ記」をはじめ、「少年の義務」、「國ヲ富マス一奇策」、「近世豪傑物語」など、二十歳前の烏水の文章には、明治の青年らしいナショナリスティックな気概とセンチメンタルな感傷とがないまぜになった〈歴史もの〉のたぐいが目立つが、すでに初期の頃から、紀行への関心の芽生えを発見することができる。

「鎌倉江島紀行」は、1892(明治25)年5月8日に、今井幸吉、飯田由太郎と連れ立って出かけた、「鎌倉の古跡江島の奇景」⁹⁾を訪ねる日帰りの旅をもとに書かれたものであるが、烏水最初のまとまった紀行文である。仕上がりにしては、要するに、道すがら立ち寄った名所旧跡についてごくありきたりの解説を加えた程度で、いまだ既成の探訪記の域を越えていたとは言いがたいものの、原田久太郎の発句をあいだにはさむなどの工夫も見られる。しかも、交通事情が完備されていなかった時期のことで、列車を乗り継いで江ノ島までの遠出は、18歳の烏水にとってはそれなりに強い印象を残したにちがいない¹⁰⁾。これと同時期に書かれた他の文にも、「おのれ、いたく名勝に遊び古跡を探るを好み、路芝^{みちしば}の青きを踏みて薪木^{たきぎ}こる鎌倉の山に古戦場を吊^{とむら}ひ、海原のひろきを眺めて貝拾ふ七里ヶ濱の干潟に遊び、日記に墨塗るを以て樂^{たのし}みとせり」¹¹⁾とあり、生来の性分として、こうした類の〈遠足〉を好んでいたことを自認している¹²⁾。このようにして、烏水は、名所や自然の風物を求めてかなり遠方にまで出かけて行き、実際に自分の足で歩きながら、現実の環境・自然に直接接触れることをとおして、そこで観察し、かつ感じとったものを文章化することの喜びをおぼえていったことがうかがわれる。

そこには、また当然のこととして、文章修業の実践が伴っていたのであって、少年時代からもともと好きなジャンルであった紀行、風土記のたぐいを、烏水はいろいろとあさり、読んでいた。烏水に影響を与えた紀行関連の書として、近藤信行氏は、やや古いところでは、漢文紀行の頼山陽や斎藤拙堂、あるいは貝原益軒、沢元橙、また同時代では、幸田露伴、遅塚麗水、志賀重

昂、徳富蘇峰などの名前を挙げているが、早くから「文章典範のたぐいを読みこんだ」、いわば文章作法にかなった文を書き始めていた鳥水のことであり、実際に「文庫」等への投稿を継続的に行うことによって、記者たちからの評価・忠告を与えられ、自身の文章力に磨きをかけていった¹³⁾。

こうして近郊の散策から始まった旅は、しだいに遠くの山へとむかっていく¹⁴⁾。1896（明治29）年に発表された「函嶺紀行」は、のちに槍ヶ岳の同行者となる岡野金次郎と冬の箱根路を歩いた時の文章である。「謂へらく、遊客の少なく俗塵の交はらざる時に乗じ、一遊して山の奥、水の涯を探らばやと。吾及岡野某、亦烟霞の癖あり、今茲丙申の歳、一月廿五日、遂に相約して登山を決行せり」¹⁵⁾と、勇ましげなことばと共に保土ヶ谷駅を汽車で出発したふたりは、塔の沢の温泉宿に一泊、翌日、芦ノ湖まで登った。湖畔では箱根連山の眺望を楽しみ、曾我兄弟の墓や箱根神社などを訪れている。

この「函嶺紀行」は好評であった。「簡勁にして多趣なる文字、錯綜排列精練の跡殊に深きを覺ゆ、山中の人事見るに従つて録し、却つて風光の美量を増さしむること尤もよし。筆致まことに函山の景と相添ふものと謂ふべし」¹⁶⁾とは、滝沢秋曉の評言であるが、たしかに、山を歩きながら物事をよく観察し、それをリアルに描写しようとする意図が、かなり明確に現れるようになってきている。「蘆ノ湯に係れる一道、俗に『七曲り』と呼べる阪を屈曲し盤回す、忽ち一山を失ひて直に半峰を仰ぎ、上ると愈よ甚しくして試に頭を回らせば仙家何處に在る、馬は白雲の中に嘶きて小地獄池尻皆叢萱の裡に没却し、晴嵐一白、横さまに二子山の頂を掠め去りて一片の殘雲、布の如く舗き、鞆の如く蹙まり消ゆ」¹⁷⁾といった描写は、じゅうぶん印象的であるし、漢字の使い方に巧みであって、まさしく秋曉の評言のとおりではあろうが、きわだって山岳紀行としての斬新さを表現するまでにはいたっていない。

それは、鳥水の表現力もさることながら、むしろ山の性格、つまり登山よりは遊山といったほうが相応しい、箱根の山の佇まいに制約されている部分も少なくあるまい。みずから言うところの「烟霞の癖」に誘われつつ、さら

なる奇勝旧跡探索のこころざしを充たさんとする思いから、山に登るという企図を抱いて、箱根行きを決めたのであろう。だが、登山という以上は、その対象としてどのような山を選び、それにどのようにかわるかが、問われてくるのであり、もっと本格的な登山に見合った山を目指すのでなければ、行為としての登山についても表現としての紀行についても、どちらとも、新たな地平を開きだそうと期待するには不十分といわざるをえない。要するに、箱根程度の山では、まだ物足りないのである。「この日、^{あした}晨に装ひて嶺下を發してより『箱根八里』と唄はれたる^{うた}崢嶸を^{さうくわう}躪え^こ了んぬ。その行路は、人煙遠き幽径を^{たど}辿り、^{かさ}丘巒なれる中の狭路を^こ匝り来りしものなれど、余等は未だ山の奇峭、路の^{きく}崎嶇なるところに於て意に^み充たざるところあり」¹⁸⁾ といった部分を読むと、烏水自身、すでにこのことに気づいていたことをうかがわせる。

そうした自覚に突き動かされてのことであろう、その後の烏水は、たしかに、より高い山、より困難な山旅を求める方向へと進んでいった。

臆患の焰 — 多摩川遡行の旅 —

1898 (明治 31) 年、烏水は、3月に、多摩川上流から甲斐へ、そして10月には、妙義山に出かけている。多摩川は単独行、妙義には久保天隨が同道していたが、これらの山旅は、より困難な山を目指そうとする烏水の新たな一步として、位置付けられるべきものであった。

この時に書かれた紀行文は、1899 (明治 32) 年に刊行された烏水の処女出版『扇頭小景』に載せられることになるが、「多摩川を溯る記」「丹波山を躪ゆる記」「昇仙峡」は、どれも最初の多摩川上流の旅についてのものである。

「桃は未だじ、梅はさかりを過ぎたれど、藍より青き雪代水、弓の如くなる崖に沿ひて流るゝあたり、練絹の茵より柔き嫩草を踏み、羽弱き蝶を追ひ

て、そゞろありくもいと興あり」¹⁹⁾と、初めは、風流心に誘われるままに旅立った趣きながらも、旅路が進むにつれ、いまだ冬期の厳しさを残す山中では、あるいは驚嘆し、あるいは感歎し、あるいは共感し、そして戸惑いと、さまざまな感動をこもごもあらわにする、初々しいばかりの鳥水の姿が見られるようになる。

青梅を発って多摩川沿いに辿り、小河内、丹波山から、柳沢峠を越えて塩山に下り、昇仙峽を見たあと、富士川を下って東海道にぬける行程であったが、ようやくこの単独行は、鳥水にとって、初めての山旅らしい旅になった。山の初心者にとっては、奥多摩の山でも相当の厳しさであったようで、3月とはいえ、出発時から新雪を見、雪景色に憧れて敢行した柳沢峠越えでは「一生涯に又あるまじき辛き目」²⁰⁾にまで遭っている。「柳沢峠を踰ゆるまでの六里の岨道、雪に悩みて凍と餓と並び到りたる時、藪は土堤に萌えたりど手は延びず、鹿林より跳り出たれど腰起たず。淡雪の息一つ吹きかけて消ゆるが、そのときの吾命なりしが、余は神に謝す、佛に謝す」²¹⁾というほどの体験は、それなりに、鳥水の探検的欲求を満足させるものであったようである。そして、彼の眼は、未知なる土地の風俗、景観の具体的な観察・描写に向けられ、その視線をとおして、山水趣味を突き抜けるかたちで、民俗学的地理学的な関心に裏うちされた実証的な姿勢が示されているとあってよい。

さらには、そのような中で、次の一節に出会うことも、鳥水的心情を知る上で興味深い。

「我や、一たび都門に入りてより、粒米に追はれ、束薪に迫られ、あらには小兒の如くに、平和を装ひて笑へども、陰に白刃を礪きしこと、いくそたび。所詮正覺はおほつかなき我なり、むしろ大俗に墮して名利の狗たらんと、瞋恚の焰、苦雨凄溟、胸安からざりしけふこのごろ、山水吾累を成す、一に何ぞ酷だしきと、おほえず涙下る」²²⁾

ここには、名利の狗と墮したおのれの生きざまに対する、激しい自嘲と自責の念が読み取れる。1895 (明治 28) 年、烏水は横浜正金銀行に就職しているが、この多摩川上流の旅は、初めてもらった賞与のおかげで、計画した旅であったという²⁹⁾。入行後ようやく三年にして手にした賞与であったわけだが、嬉しさは当然あったにしても、烏水の胸のうちは、それほどすっきりしてはいなかったらしい。

あらためて、すでに触れた「余慚悲血を溺せり」の表白のことが想起されるが、烏水は、大学進学もかなわず就職を余儀なくされたおのれの境遇に対する屈辱の想いを、そこに吐露していた。

この「余慚悲血を溺せり」ということばは、もともと 1898 (明治 31) 年の「文庫」第五十七号に発表された「乞丐兒」に出てくるものであるが、実は、その後に「乞丐兒」が『木蘭舟』に再録された際には、この部分が削除されている。あまりに赤裸々な告白であること、もっとも親しい知己の固有名も出てくることもあって、掲載を憚ったのであろう。

しかし、それにしても、当初書かれた 1898 (明治 31) 年は、多摩川上流の旅と同じ年であることを思うと、当時の烏水が何らかのクリティカルな心理状況にあったと思えてくる。そして、それは、「乞丐兒」にまでおのれを重ね合わせることをいとわない、一種の敗者的意識とでもいうべきものとなっていたと推測できる。

「多摩川を溯る記」では、山を歩いていてそうした敗残感に襲われた時の心が描かれ、それは、他方で、鄙びてはいても楽しげな、そしてそれなりの自由さを失わない「仙人の生活」と対比されている。そのような「仙人の生活」が生きている自然の姿に引き較べてみれば、都会の境遇のあさましさ空しさの感慨が、いっそう募ってこざるをえない。そこには、自然対都会、とりわけその自然の象徴たる山対都会という、対照の構図がすでに浮き上がってきている。しかも、都会の否定として山をとらえる姿勢は、このあと烏水の中でますます鮮明になっていくと共に、都会での敗者の意識は、この構図

の中で、かえって山に生きる自己の肯定へと転換されていくのである。

膽をもて上る山——妙義山行——

同じ年の秋の妙義山行は、同行した久保天隨のイニシアティブによるところが大きかった。天隨は、小学校同級時代から烏水の友人であるが、この時は、東京大学に進学して漢学を学び、早くも文人として名を知られ始めていた。やはり旅を好み、紀行文をよくし、その点では烏水の先を行っていたと見てよい。妙義も二度目であった。

「この妙義山行は、天隨と烏水がはじめから紀行文を書くことを目的にした旅であった。書くために歩き、記事にするために山に登っている」²⁴⁾と、近藤信行氏が指摘しているが、もとはふたり合作の紀行文を意図していたのであろう。しかし、烏水がまだ準備中と思っていた原稿を、ある事情から、天隨が烏水の了解なしに、かってに読売新聞に入稿してしまったという。そのため、烏水は、単独で「妙義山の秋」を、それより遅れて翌年の1月に、改めて「文庫」に発表せざるをえなくなった。ただし、その際には、新たな第八章を書き足している。

山行中は取材目的のノートをたずさえ、それに基づいて書かれた「妙義山の秋」は、詳細で臨場感のある描写に富んだ作品に仕上がっている。しかし、その基本スタイルは、あくまでも漢文調を主体とするものであり、「雲絲縷々として鉄山を補ひ、石罅に交絡し、俛仰の間、氣象萬千、絮を寸斷して走り、帆を懸けて走り、白衣の人、蒼狗に跨がりて走る」といったようなスタイルである²⁵⁾。合作のたてまえとはいえ、共に有望新進文士と目されていた両者であれば、互いに競い合う意識が働いていたとは、じゅうぶん考えられるところであろう。とりわけ、天隨が一步先んじていた状況を考慮すれば、烏水の側に、ある種のライバル意識が芽生えたことは想像にかたくない。天隨は漢学の専門家であるし、山容自体がまさしく水墨画的な妙義山を前にして、

山水趣味の漢文では、やはり烏水のかなうところではなかったというのが、実態であったと思わざるをえない。とすれば、烏水としては、自分なりの独自の意匠を工夫することによって、天隨との違いを際立たせることを迫られたはずである。

「図書館をあらして材料を萃め、新に書き足した」²⁶⁾ という、妙義山をめぐる地名考証を内容とする第八章を追加したことに、そうした烏水の意図を探ることはじゅうぶん可能である。これについては、前半の合作部分の第四章で「帝、巨靈五丁の力を合して女媧が練れる五色の石を劈破せしめ、之を上毛の地に置く、今も猶雲根を掘り得て峻嶒玉立す、五色の山これなり」²⁷⁾ のような、まさに山水的世界での山の由来が語られていたことに照らし合わせて考えれば、烏水が、天隨との差異化を意識して、あえて同じテーマをより〈学術的〉な仕方で取り上げてみせたものと見てよいであろう。そうした目論見は、結局はフィクショナルなものでしかない定型化された知識と技法を駆使することに終始する山水趣味から離れて、もっと現実に即した実証性を求める姿勢となって現れてきている。それが、一方では、学術的科学的な興味を形づくとともに²⁸⁾、他方では、登山行為そのもののリアルな描写に向かわせている。例えば、「初めは足をもて上り、半にして手をもて上り、はては竟に、膽をもて上る」とか、あるいは「鐵鎖に危一髪^{ついで}の命を繋ぎて、胴も足も石の稜角を放れ、石の銚^{ぼう}あるものに頬を^ま姿^ま摩^まして^よ攀^よち上れば、別に又鐵鎖あり、之を手繰^{たぐ}り寄せて、やうやく絶頂に上るや、瑰奇なる丈六の石に、簇生したる松葉牡丹の茵を腹に敷き、岩躑躅に膝を凭せて蒲伏しぬ」²⁹⁾ のような、急峻な岩場を登る場面の描写は、素直ながらも、実際の登攀感覚をじゅうぶんに彷彿とさせるものといってよい。

しかも、そこには、烏水の、そうした登攀を楽しむ気持ちが感じられる点にも、注目したい。妙義山の岩場は現実に滑落事故の危険を伴った、かなり険しいものであるが、烏水は果敢に絶壁に挑み、怯むことがない。その、いわば危険と遊ぶとでもいうような岩壁登攀の面白さを、ユーモアを交えた文

体の効果も加わって、鳥水はうまく表現している。そこが、こうした個所では尻込みせざるをえない天隨との違いであって、長い伝統のなかで積み上げられた、いわばクリシェ的な表現の体系を素養として身につけることで、それを作法通りに使いこなすための学習が第一義的な意味をもつ天隨の場合には、山の文章を書くために、あえて危険を犯してまでも現実の登攀を必要とすることはない。鳥水は、それに対して、書くためには、山に登ることを求めたのである。

このような鳥水の志向は、当然次の段階として、よりいっそう高い山、登るのが困難な山に向かっていく。彼が目指したのは、浅間山であった。

山らしき山に登る — 浅間山 —

1899（明治32）年10月に登った浅間山は、鳥水の登山経験の中で、大きな意味をもつ。「我が山らしき山に登りたるは、實にこのたびの浅間山をもて始めとす、故に偃松におどろき、溶岩流におどろき、噴火孔おほいに大におどろく、我はじめて大自然の威厳に接したればなり」³⁰⁾と書いているように、要するに、鳥水にとっての最初の高山であったからであり、独立峰の火山であることとも相まって、いっそう高山の印象は鮮烈なものとなった³¹⁾。浅間登山紀行は「浅間山の煙」と題されて、1900（明治33）年1月「文庫」に発表された³²⁾。

この時の鳥水は、御代田の宿で依頼した案内を伴って、追分ヶ原から登路をたどり、前掛山をへて、絶頂の「釜」にまで登りついているが、その模様を、すっきりとした登山紀行にまとめていることが、紀行文としての「浅間山の煙」の特徴である。「妙義山の秋」が、その執筆事情のゆえもあって、過度なまでに文飾にこり、漢文調の誇張がうるさいほどであったが、今回は、そうした気取りや衒いが感じられない。むしろ、「お山の見収めに」と言ってみずから同伴を乞うた宿の隠居との会話を楽しみながら、ゆったりと歩を

進めていくのであるが、その様子が淡々とつづられ、文体も平易、描写も実際の登山の様子に即した具体性のあるものになっている。烏水の実証的な姿勢の現れとあってよいであろう。ただし、科学性の点から見ると、まだ不十分でしかなく、烏水自身もその点は自覚していて、ここでの記述に満足していないことを、他で述べている³³⁾。

しかしながら、「淺間山の煙」を読むと、明らかにそれ以前とは受ける印象が異なっていることに気づかざるをえない。近藤信行氏も「あいかわらずの美文調」ではあるにせよ、それまでの紀行文とくらべると、「やや硬さがとれてきている。ふくらみのある文章を持つようになったのは、自然のなかに自己を投入してありのままを描こうとしはじめたことによるし、自然観察者として描写に具体的な表現をこころがけたからであろう」と述べて、こうした烏水の変化に対して、「いわば日本三景式の山水趣味からの脱皮であり、山岳人烏水の誕生をむかえたといえるだろう」との評価を与えている³⁴⁾。

たしかに、ここに現れた烏水の変化は、彼の内面のかなり深いところで起こったものと見られるべきであり、その意義についてじゅうぶん検討する必要がある。

まず指摘されるのは、登山中に烏水がみせる、澆漑として闊達な様子であろう。

「満山皆砂と焼石とにて、道てふ道もあらずなりぬ、さすがの案内者もかうではなかりしと怯む色あり、半途にて下山もし兼ねまじかりしを、我は絶頂なる火桶のごとき赭ら岩あかに目をつけ、爺の介抱を恣に任せて只一人、胸衝く坂うづの焦石あかに杖を深く穿ち、紛々たる露華うがを眉毛に貫きて匍はひ上りぬ。……赭ら岩あかに手を掛けてその蔭を見わたせば、こゝは前掛山の絶頂にてこれより摺鉢すりばちのやうに斜めに下り、底には大火坑あり、勇み立ちて親子を呼ばんと振り返りたるをりしもあれ、杳茫えうぼう一氣、空霄の中を亘りて、山の隅たに、谿たにの隅、雲かあらぬか、一時雨ほど顔ほどほしに迸りて冷鐵を

頸に加へられたるごとし、呼吸も窒^{ちつ}すべうおぼえておもはず俯^{うつむ}向くとき、襟卷代りの手巾^{ハンカチ}、主^{はし}を捨て奔りし。はや釜（噴火坑をいふ）に近きぞと呼^{よほ}はりて、岩より飛び下れば、これに氣を得て親子も後より入り来る³⁵⁾

頂上間近の光景であるが、悪路にひるむことなく、むしろ嬉々として前進を続ける鳥水の姿が、実に印象的である。

妙義でもそうであったが、鳥水は登るという行為自体を楽しんでいる。しかも、困難な場面に遭遇すると、かえって他を抜き出した力を発揮できたことが、これらの記述からもじゅうぶんにうかがわれる。彼は、このように実際の登山で、みずからの優れた登攀能力を試していた。その体験は、確かな達成感となって、自然の領域に入って行動する時の、自分の力に対する自信を彼に与えていったのであろう。

西欧との対峙

このことは、また、文章を書くことについても影響を及ぼすものであった。

「おもしろきかな行樂の旅人、わが心は雨絲に動き、風片に動く、動きたるとき試^{こころみ}に薪を割れば斧^{おの}の軽きをおぼえ、動かざるとき徒^{いたづら}に文を作れば筆^ひの挽^くきがたきに困^{くる}しむ、萌え出づる若草の希望^{ほら}を孕むは今の我なり³⁶⁾

これは、麓の追分ヶ原を歩きながらの心境であるが、みずからのうちに、書くことへの強い促しを感じとっていたことが表現されている。実に、それを「萌え出づる若草の希望」に喩えているのであるが、ここでも、自分の表現者としての力に対して、鳥水が一定の確信を抱くようになっていたことが

読み取れる。この一年前、「汝何ぞ脆きこと螻蛄の如く、迷ひ易きこと胡蝶の如くなるやと、自ら茫乎たる我を叱すれども、自然が揮へる鐵槌の下にはいかなる詩人のペンか折れざるべき」³⁷⁾と書いて、おのれの文章力にまだ迷っていた頃との違いは、明らかである。

しかも先の引用のあとには、更に、「焼くゝ雉子の悲鳴を擧ぐるは後日のおのれか、そは知らず。血に叫びたるパイロン、われ時鳥の帛を裂く聲に若かざるを念ふ、血を啜りたるナポレオン、われ隼鷹の小雀を搏つ伎倆に下れるを嘲る、よし我は秋の色の繪絹よりあざやかなるを東海の富士にあづけ、秋の心の錐より痛かるを東山の淺間に試みむ」³⁸⁾と続けて、おのれの未熟さは認めた上で、なお、それを突き抜けて進もうとする意志の表明になっている。まさに、一種の吹っ切れた爽快ささえ感じられる口ぶりである。「嗔恚の焰」に悶える、かつての悲壯感漂うペシミズムとは、調子がまったく異なっていることに驚かざるをえまい。このような変化ないし転換が起きていたとすれば、そこには、何かそれを惹き起す特定の出来事や体験があったことを、それが具体的に何であったかはつまびらかではないものの、やはり想像したくはなつてこよう。

もうひとつ、次の一節にも注目してみたい。浅間の頂上についた時の感慨を述べている部分である。

「山上に空あり、山下は無なり、山中こゝに人あり、地球と月球との距離より遼遠なるべき神の座と人の世の間に、五尺の身を繋ぎて、形骸をこの世に、靈魂をかの座に」³⁹⁾

ここでの書き方の特質は、自然の中にあつて、神の座と人の世とを対立的に捉え、そこに、天と地という位置関係、および形骸と靈魂という価値関係の両面において、二元論的に対照させていることであり、そして、地にある人を天につなぎとめる媒介の存在をも想定して、その役割を山に象徴させて

いる点である。こうした自然ないし世界理解のパラダイムは、本質的にアニミズムを内包し、同じ生命を互いに分かち持つ同質的・非対立的なものとして世界を捉えようとする日本古来の理解とは異なって、西欧的と見るべきであろう。また、日本の場合、自然の一部たる山は、直接的に神のいる神域であるか、もしくは、それ自体が神的存在「御神体」となっていて、山に入る人間はそこで神それ自身に触れるのであって、ここでのように、けっして媒介的關係にとどまるものではありえない。

前の引用でも、バイロンやナポレオンの名前を引き合いに出していたが、それは、文脈のなかで何か唐突な感じがしないでもなく、この時の鳥水が、かなり意図的に〈西欧〉を印象づけようとしていたとも見受けられる。

横浜育ちの鳥水は、幼い頃から西欧に触れながら育ってきた。その経験は、かならずしも西欧肯定的なものとは限らず、むしろ西欧への挑戦的意識を形成させる面があったことは事実である⁴⁰⁾。とはいえ、実際の生活をつうじて、西欧の文化・知識・文物・経済と日常的に交渉をもつことによって、西欧に対する実質的な理解が培われていったことも認めなければなるまい。また、横浜商法学校の教育でも、校長美沢進は、サミュエル・スマイルズの「自助論」をテキストに講義を行い、「天は自ら助くるものを助く」という近代西欧の〈独立自尊〉の考えを教授したが、鳥水は、その講義に強い感銘をおぼえたとされる⁴¹⁾。そこには、またさらに、卒業後、銀行員としての外国との接触が加わってくる。こうした幼児期より蓄積された西欧体験のすべては、鳥水に対して、日本を見下す態度をとって憚らない外国商人にへつらいながら、惨めな境遇を跳ね返すことさえできない脆弱な日本人の現実をみすえ、安易な国粹主義的反発・拒否ではなく、西欧と真っ向から対峙し、それに太刀打ちできる力をそなえた、真に強固な自己を作り上げるべきことの重要性を自覚させるものであった。こうしたことから、鳥水にとっての西欧とは、単なる机上の知識であるよりも、現実を構成する生きた要素として、彼の生活の実質をなしている。それは、〈和魂洋才〉的な付属物としての西欧では

なく、おのれの精神自体が変容し、ある部分においては西欧化されることまでもを含んだ、新たな自己の形成を促すような経験そのものになっていたと考えられる。

この頃の烏水が、具体的にどのような西欧の書物をどれだけ読んでいたかを確定するすべはないものの、知識欲旺盛な烏水のこと、可能な限りいろいろと原書も含めて貪欲に読みあさっていたことは、想像にかたくない。その中に、山やアルピニズムに関するものが含まれていたかについても、やはり具体的に確認することはできないが、こうした学習の結果は、当然、漢籍的なものとは異なったジャンルの知識世界を開き示すものであったし、とりわけ自然の見方については、山水的な水墨画の自然とは異質の、実証的科学的な自然の捉え方に気づかせてくれたはずである。そして、烏水自身の実践的な山体験に即して見た時、それは、彼のうちに培われていた経験的な感性にとって、よりいっそう適合する自然の姿として現れてくるものであったことが、指摘されなくてはならない。

山水趣味からの脱却

だが、烏水自身が述懐しているように、烏水に山と文の嗜好を教えたのは、幼い日、友人の久保天隨らの家で出会った漢籍や浮世絵のたぐいであり、ほかならぬ漢文的な山水趣味が出発点をなしていたことはたしかである。烏水の、とりわけ初期の漢文調の文章をみれば、いかに漢文的素養が烏水の教養の基礎を形作っていたかは、すぐにわかる。烏水の紀行文の原点が、山水趣味にあったという事実は動かせない。そして、彼の周囲にいた友人たちや「文庫」の同人たちも、ほとんどすべてが、同じ漢文的素養をになっていた。そうした人々が集う世界の中で、烏水もまずは頭角を表してきたわけであって、その点において、特に彼が他にひけをとるようなことがあったとも思えない。しかし、そこには、常に同じ土俵での戦いをしいられる状況があり、

そのかぎりでは、厳しい競争意識をもって、文人の活動に参加してははずである。

しかも、このような環境の中では、鳥水の場合、どうしてもある種の心理的イメージ連関として、いわば敗者的なイメージがつきまとっていることを否定できない。それは、すでに触れたような、幼い頃の貧しさの記憶につながるものである。天隨らのおかげで開かれた山水趣味の世界は、彼らに対する引け目の意識をも伴って、かつての慚恚の叫びを思い起こさせるものでありつづけたに違いない。そうしたやるせないしがらみを引きずりながら、山水趣味にとどまりつづけることは、鳥水には、それなりにつらいこだわりを残すものであった。

それと共に、さらには、表現のレベルでも、はたして同じ土俵にそのままとどまることがよいかどうか、といった問題意識が芽生えてきたことが予想される。鳥水の実践してきた自然の山旅と西欧との接触によって蓄積された経験は、山水趣味の表現世界を突き抜ける促しを含んでいたからである。

この点に関しては、鳥水自身がきわめて適切に問題を分析して述べているので、それを聴こう。

鳥水によれば、漢文の紀行文には「いつの間にやら、救済す可らざる痼疾がわだかまつてしまった、それは何かといへば、構文上のオーソリチーを、^{つね}恒に故典に求むる結果、或は『古昔崇拜』の支那思想に支配せられた結果、成るべく今様に互るのを避けて、古代がらうとする」、「故に何を書いても一定の形態があつて、それに^{はま}倣らざる以上、作る者自ら安んぜず、讀む者亦^{また}惑ふおもむきあるを免れない」と指摘されている。そして、「漢文の紀行文は要するに『文字のための文字』であるから、その地は則ち空天幻地、その文は則ち假設虚構、既に地に切なるものなし、いかでか文に忠なるものがあらう、その雕琢萬遍なるは、文に忠なるにあらずして、^{ない}倣なるものである」と結論付けられている⁴²⁾。つまり、漢文調で書いている限りは、現実をリアルに映し出す文章は書けないわけである。そこでは、クリシェ的な約束ごと、

いわゆる文章作法がものをいうのであって、その作法にかなっているかどうかがすべてということになる。しかも、肝心の描くべき対象たる自然そのものに関しては、実証的な観察が軽視されてしまっている。この点でも、烏水の指摘は明確である。「紀行は旅行に伴ひ、旅行は地理に伴ふのであつて、單に高い山、低い山、大きい川、小さい川といふやうな、外廓や概念を寫すのなら『歌人は座ながらにして名所を知る』的に、空想で好きな景色を拵へて、書いてもよいのであるが、旅行といへば既に何の山、何の川と、特指せられた土地の上に立つのであるから、その土地特有の景象が文字の上にははねばならぬ、その土地特有の景象、則ち人間でいへばその人特有の性格に當るものを捉^{キヤッチ}するのが観察眼で、之を摸^{コッピ}するのが紀行文なり、敘景文なりの能事ではあるまいか」、そして「これらは皆兀座危座の想像以外で、親しく足を搬^{はこ}び手を動かさなければ、捉^{とら}へ得ぬところで、既に捉へ得たらば、その眞を摸さなければ活き得ぬところである」⁴⁹⁾。

こうした漢文調の欠陥に気づいていた烏水は、漢文によっては、自分が求める、自然の観察に基づく実証性を踏まえた具体的な現実を描くことはできないことを理解せざるをえなかった。山水趣味の漢文調からは、脱却しなければならなくなる。山水趣味は、表現者としての烏水の原点であると同時に、そこから解き放たれなくてはならないものとなっている。山と西欧に促されて、山水趣味を超えて新たな紀行文の可能性を探ることが、解決すべき課題となって、烏水のまえに提示されていた。

このような問題意識が烏水のうちで形成された時期については、上に引用した文が書かれたのが1903(明治36)年であること、だが、引用での見解にいたるまでにはすでにそれ先立って始められていた模索の過程があったはずであり、それを踏まえての結果であること、そして、すでに1898(明治31)年に発表された『日本名勝記』を讀みて麗水氏の紀行文を評す」の中で、これと同様の問題点の指摘がなされていること、などを考えあわせるならば、少なくとも1898(明治31)年頃から、それなりの時間をかけて、こ

うした文章表現のあり方についての批判的検討が進められていったと見てよいであろう⁴⁰。

ただし、鳥水が、西欧流の文章法を学び取ることで、直ちに新しい独自の紀行文のスタイルを見出しえたとは結論するわけではない。彼は、なお引き続き摸索の時期にあった。摸索をつづけることで、問題の所在がいつそう明確になっていったのであり、その過程において、上に考察した三つの山旅とその紀行文執筆が、とりわけ重要な意義をもっていたということである。

槍ヶ岳遠望 — アルピニズムの地平 —

これまで、それぞれの山旅をめぐって、登山と紀行の両方の観点から、それが鳥水の精神性に対して及ぼした意義を検討してきたが、高山を対象とした冒険的登山、および西欧との接触をとおして、山水趣味を超えたオリジナルな方向性が見えてきたという自覚を鳥水が抱くようになったのが、この浅間山登山を経過した頃にあたっていたとの推測が成り立つ。そうしたことの結果として、いわばこだわりを捨てた心理状態での山に対する素直な想いが、「浅間山の煙」での率直な書きぶりとなって現れてきていたのである。

このようにして、1899（明治32）年頃の鳥水は、ひとつの大きな転換期を迎えていたと見なすことが可能になる。鳥水の最初の著作『扇頭小景』が刊行されたのが、この1899（明治32）年のことであった。鳥水は、その文筆家としての生涯の当初から、紀行文作家としてデビューしたわけである。そのあと『木蘭舟』、『銀河』と、つづいて年ごとに発表していく。「文庫」から単行本へと発表形態を変えたのは、自分の作品をまとめて世に問いたいと考えたからであろうし、また、それをしてもよいと、自分なりに決心がついたからにほかなるまい。

これらの作品は、おおむねよい評価でもって迎えられ、鳥水は、新進の文士として紀行文を中心に、いよいよ活発な執筆活動を展開していく。それに

伴って、そのための取材活動・フィールドワークとしての山旅も、内容的な充実度を増していった。

烏水は銀行員であったため、やはり大きな旅行は、年一度の休暇を利用するしかなく、「閑暇至つて乏しきため、三日以上を費やす旅行は、一年の内僅に一回之を得る希望あるのみ」と、彼自身述べている⁴⁵⁾。そうした主な山旅だけでも挙げてみると、すでに取り上げた、1898(明治31)年の多摩川上流から甲斐の旅、同じ年の妙義山、翌1899(明治32)年の浅間山があり、翌1900(明治33)年は飛騨に行き乗鞍岳に登った。そして、1902(明治35)年の槍ヶ岳となる。その後は、毎年、金峰山、八ヶ岳、甲斐駒ヶ岳、富士山、赤石岳、木曾駒ヶ岳などと続いていく。これを見ても、年をおって厳しい山に登ろうとしていることが理解できる。それは、まぎれもなく、高きを求め未知に挑む烏水の山に対する姿勢の現れであり、アルピニストとしての姿が、次第にはっきり浮かび上がってくる。

すなわち、浅間山で芽生えた高きを求める山への志向は、烏水をまず乗鞍岳に向かわせたのであり、そこで、遂に〈三千メートル〉を超える体験を得た。当然、その紀行文も、新たな段階に到達したものであるべきであり、烏水自身、そのことをじゅうぶん自覚していたにちがいない。しかしながら、その紀行文たる「乗鞍岳に登る記」は未完のまま終わっている。彼の意図にかかわらず、なかなか思い通りの文章が書けなかったというのが、その理由であろう。やはり、表現において真に山水趣味を突き抜けるためには、槍ヶ岳の、真にアルピニズム的な登山ないしは探検の経験を必要としたということにほかなるまい。

槍ヶ岳の姿に烏水が初めて接したのは、浅間登山のあと、上田から浅間温泉に向かう途中の稲倉峠からの遠望であったとされる。「鎗ヶ嶽探險記」の「信濃上田より松本に到る途みちすがら、稲倉峠しなくらの頂にて初めてこの山を仰ぎたりき、突兀とつこつとして尖葉形せんえいの高塔、霄漢せうかんに聳えたるさま、四周あたりに山も無げなり、余はかの塔には人間の覗うかがひ得ざる何物かを秘めたるにあらずやと疑ひぬ、そ

は宇宙の創世紀を刻みたるにてもあるべし」⁶⁰という記述を読むと、この時、自然の中での槍ヶ岳が「人間の覗ひ得ざる何物か」を秘めていることに気づいていたような烏水の口ぶりである。

それは、人間を超越した存在として山を捉える感性の発露というべきものであるだろう。しかも、山の超越性は、自然としての宇宙創世と関係づけられている。このようなテーマ設定を可能にするような意識形成の過程を、烏水が経過してきたという事実を、ここで確認しておくことは重要である。それは、まさに西欧的アルピニズムの世界と呼応する要素にほかならない。山と向き合った時、山水趣味的なイメージから自由になって、新鮮な感覚で山を眺めるアルピニスト烏水の姿が、そこにある。

アルピニズム的なテーマ系を、初めての槍ヶ岳の回想にまでさかのぼって記述していることは、烏水が、槍ヶ岳という山に対して、アルピニストとしての自己形成の面で格別の意義を与えていたからであろう。そして、アルピニストとしての自己意識に促された経験のただ中で、「鎗ヶ嶽探險記」という新たな表現の地平が切り開かれていった。

※ ※ ※

以上、明治の近代化が進行していた時代において、西欧化の影響を受けながら、山の紀行文に新たな文章表現の可能性を模索した小島烏水の、初期の頃の文章修行の過程をたどってみた。

そこでは、山水趣味の漢文調から出発しつつ、それとはまったく異質な表現のスタイルを目指した経緯に触れることができた。幼い頃に知った山水趣味は、表現者としての烏水の原点にほかならなかったが、それは次第に、そこから解き放たれなくてはならないものになっていく。

そこでは、文章表現を支える経験の位相において、烏水の人間的な自己形成の消息がかかわっていた。烏水の場合、それは西欧的近代化の所産としてのアルピニズムにおける経験の蓄積であり、その実践者たるアルピニストとしての自己形成であった。それはまた、個々の体験を私的な想い出として感

情のひだの中に貼り込むだけの、感傷的追想のレベルにとどまることなく、自己の内部に書き込まれ構造化されることによって、自己のありよう自体の変容をもたらさずにはおかない記憶となりえた。そうした自己のオリジナルな経験によって培われた新たな精神性に対して、それに相応しい表現形態が模索されたのであり、烏水の山の紀行文の可能性が生み出されたのは、そうした経緯からであった。

したがって烏水の場合は、従来の山水趣味的紀行文と異なり、書くために、実際に山に登ることが求められた。しかもそれは、よりいっそう高い山、より困難な山に向かい、あえて危険を犯してまでも、より厳しい登攀への挑戦につながっていく。

それは、また、時代状況と、とりわけ烏水の置かれた横浜という生活環境の中で向き合わねばならなかった、西欧化の影響への対応という意味をもっていた。和魂洋才にとどまることなく、いわば洋魂そのものの実質に触れることで和魂を突き抜ける契機が与えられ、そこから、従来の伝統的にコード化された表現系が相対化され、そうした既成の体系内部でつくり込まれた感受性の回路、すなわち〈花鳥風月〉に象徴される〈日本の心〉的なパラダイムの組み換えが企図されるようになる。

このようにして、山と西欧との交渉から生じた促しによって、山水趣味に代わりうる紀行文の可能性の探究を課題とした烏水にとっては、アルピニズムをモデルにした高山を対象とする冒険的登山こそが、目指すべき方向を開き出すものとならざるをえない。

その意味で、表現において真に山水趣味を超えてするためには、槍ヶ岳の、真にアルピニズム的な登山ないしは探検の経験をまたなくてはならなかった。日本の山の中でもっともアルプス的な山容をもつ槍ヶ岳こそが、烏水の生涯において、まさに期を画する経験をもたらしたのであり、そこに、小島烏水の表現者としての真の出発点を見てとることができる。

《注》

- 1) 「鎗ヶ嶽探險記」、『小島烏水全集』大修館書店、第4巻11頁（以下、この全集からの引用の場合には、単に巻数と頁数のみを示す。）
- 2) 同上
- 3) 烏水たちの槍ヶ岳登山については、近藤信行『小島烏水 — 山の風流使者 伝 —』創文社（以下、単に『小島烏水』とのみ記す）第九章「鎗ヶ岳探検記」のほか、田口二郎『東西登山史考』岩波書店、第一部I-1「明治の登山の特性」、安川茂雄『近代日本登山史』第三章3「小島久太、岡野金次郎の登山趣味」、などを参照。
- 4) 「鎗ヶ嶽探險記」第4巻9頁
- 5) 『小島烏水』6~10頁
- 6) 「乞丐兒」削除分からの引用、第1巻518頁。「乞丐兒」は、初め1898（明治31）年発行の「文庫」第十巻第二號に発表され、ついで『木蘭舟』に収録されたが、この一節を含む部分は、その際、削除された。
- 7) 同上
- 8) 『小島烏水』36頁
- 9) 「鎌倉江島紀行」第1巻529頁
- 10) 「生ひ立ちの記」第10巻490頁
- 11) 「大塔宮事蹟考」第1巻454頁
- 12) のちに烏水が小学校時代を振り返って、「一つは身體も虚弱なところから、務めて遠足をするやうになつた、それには醫師の勧めもあつたが、『風土記』の誘惑もあつた」（『江戸末期の浮世繪』第14巻4頁）と書いているところを見ると、かなり幼い頃より、徒歩での遠出を心がけていたことがうかがえる。
- 13) 『小島烏水』25および51頁
- 14) 「併し休日には、得二さんと一緒に、仲よく旅行をすることはできた、後に登山を始めたのもその一變形ですらあつた」（『江戸末期の浮世繪』第14巻4頁。ここに「得二さん」とあるのは久保天隨のこと。）
- 15) 「函嶺紀行」第2巻30頁
- 16) 「解題・解説」第2巻640頁
- 17) 「函嶺紀行」第2巻34頁
- 18) 「函嶺紀行」第2巻36頁
- 19) 「多摩川を溯る記」第1巻7頁
- 20) 「丹波山を踰ゆる記」第1巻17頁
- 21) 「昇仙峽」第1巻23頁
- 22) 「多摩川を溯る記」第1巻12頁
- 23) 『小島烏水』52頁
- 24) 『小島烏水』61頁

- 25) 「妙義山の秋」第2巻174頁。この作品では、いわば師匠格の滝沢秋暁が、鳥水の文中に適宜評語を書き添えるという体裁が特徴になっているが、この部分には、「漢態形容の妙、これに後あらむ、これに前なし」と書いている。評価自体、漢文調を基本にしたものであることがわかる。あるいは、妙義山中の金剛山頂からの眺望を描いて「瞭望して我初めてこの山の高きを覺りぬ、信甲の山々、紫驪の鬣を拂ひ、跣躡して走るが如く、僵るが如く、淺間山は蒲團着て高臥したらむ如く、迢々たる白雲、巨馬に騎して之に肉薄し、倏忽去て之くところを知らず。…一片の朱霞天半に横はるや、遠山真紅に凝りて瑤界杳茫、颯として雲を追はんとす」とあるところは、「鳥水這の大観を縮して、如是精細、如是眞致、殆んど一織の遺憾なし」と評されている(第2巻180~181頁)。
- 26) 『小島鳥水』61頁
- 27) 「妙義山の秋」第2巻173頁
- 28) このことは、山中で出会った「工學士先生」に言わせたことばにも伺われる。金鷄山麓の洞窟を訪ねた時のこと、「導者恭しく燃え残りて蠟燭を洞口に立つ、こゝを御供岩といふぞ。工學士先生は、石の片割を槌にて割り、仔細に検査して、これも同じ輝石安山岩なりなどと呟く」といった場面を挿入しているが、秋暁は、ここに、「余零落の後、また復び哲理文學の書に親まず、これに代ふるに嚮きに疎んじたる科學の雜書を以てす、座右横山地質學あり、神保地質學あり、反繙日次夜、今鳥水の輝石安山岩を説くを聴き、何故とは知らず唇邊幾條の笑皺を起しぬ」と記した(「妙義山の秋」第2巻176頁)。鳥水が科学的な傾向を示したことに対して、揶揄めいた軽口の批評をしているわけであるが、悪意はない。それよりも、水墨画の情景の中に、やや無理やり科学的用語を書き込んでしまったことに、即座に反応しているところが面白いし、そこには、志賀重昂の『日本風景論』との絡みもあると考えられるだろう。このあと、鳥水が『日本風景論』の直接的影響のもとに、學術用語をふりかざした科学的な装いの文章に傾倒していった時、今度は、秋暁は「想ふに鳥水は生れながらにして詩人也。其の科學者たらんには、湿润に過ぎ、多血に過ぎ、最も頭腦の粗雜に過ぐ」(『小島鳥水』85頁)と、はっきりそれを牽制する態度に出ている。
- 29) 「妙義山の秋」第2巻174および180頁
- 30) 「淺間山の煙」第4巻128頁。また、後年、彼は「山岳を好むに至つたのも、淺間山からはじまつた」(『小島鳥水』64頁)とも言って、その意義を繰り返し強調している。
- 31) ここには、志賀重昂が「火山岩国たる日本」をもって、とりわけ火山を重視したことも、考慮されるべきであろう。秋暁も、「妙義の石組は、誠に奇らしく、不思議な出来には候へ共、聊か細工に過ぎ候やうにて、淺間はかやうにコセコセしたところは無之候へ共、噴火孔のながめの壮なるは言語に絶したる次第にて、小生は密かに『火山を見ざれば山水を説くなかれ』と云ひたく思ひ居る事にて候。

(『日本風景論』にかぶれたるやうなり) (『小島鳥水』55頁) と、1898 (明治31) 年8月26日付けの鳥水宛ての手紙で書いている。

- 32) 「文庫」第十三巻第六号。その後、『山水無盡蔵』に収められたが、その際には、かなり大幅な加筆・修正が施された。
- 33) 後に、鳥水みずから「かの後半は断然截棄すると同時に、新に稿を起したいとおもふ」(「浅間山の噴火」第4巻415頁) と、自己批判的に述べている。その結果書かれたのが、「浅間山の噴火」である。
- 34) 『小島鳥水』64～5頁。

また和田敦彦氏は、「明治期の日本における『近代登山』の成立を規定するのは何だろうか。それは実際に登山する際の目的でも、装備でも、精神でもない。『近代登山』は、厳密に言えば、言葉によって自らの行いを『近代的な登山』と規定し、価値づける営み自体によって生み出されるものに他ならない。自らの行為を近代登山として規定する言葉の流通、そしてそれらを読み、書くという場の成立こそが、『近代登山』を作り出すのだ」(「読書と山岳表象の近代」、信州大学サイト) と述べているが、「浅間山の噴火」に見られる鳥水の志向は、この和田氏の指摘に通ずるものを含んでいた。

- 35) 「浅間山の煙」第4巻124～125頁
- 36) 「浅間山の煙」第4巻121頁
- 37) 「妙義山の秋」第2巻175頁
- 38) 「浅間山の煙」第4巻121頁
- 39) 「浅間山の煙」第4巻126～127頁
- 40) そうした意識が、例えば「國ヲ富マス一奇策」や「横濱に於ける外商と内商」といった初期の文章を書かせた。
- 41) 『小島鳥水』20～21頁
- 42) 「紀行文に就きて」第4巻482～484頁
- 43) 「紀行文に就きて」第4巻478～479頁。

一般に、山水画的表現世界は、現実のありのままの姿を写すというよりは、ある種の理想郷をシンボリックな表象として描こうとする志向を含んでいると言える。その点、現実の諸問題から遊離したユートピア的虚構に安住して、現実を等閑にふしたままでよしとするがごとき調子が、そこにあることもいめないのであって、さまざまに自らの人生上の問題に苦悩していた青年期の鳥水にとっては、漢文調の紀行文に対して、ことさらに飽き足らぬ思いをいだかずにはいらなかったことが想像されうる。

- 44) 『日本名勝記』を讀みて麗水氏の紀行文を評す」において、批評の形をとおして述べられた紀行文論は、鳥水が初期の段階から、旧来の紀行文に満足せず、新たな方向を目指すべきことを自覚し、しかも、それをかなり具体的に捉えていたこと示していて、興味深い。

まず最初に「凡そ紀行文は新體詩や、小説の如く全く空想の大自然を許されてその上に土臺を据ゑられたるものにあらねば、或點までは地理や歴史と親類附合の關係なかる可らず」と、紀行文が事実を踏まえて書かれねばならないことを、前提として提示し、その上で、例をひいて、議論を展開している。「難きは自然を絞する法なるかな。之を雲に見る」と、雲を例にとりながら、「詩人自ら天賦の想像力あり、先ず腦に容くりてその佛を紙に吐くを得べし。只だ至難なるはその雲を借りて或特殊の地方に特殊の風物を描くに在り。某の山に低迷するときの朦朧、某の海に垂れて波に横はるときの混濁、雨ふるとき、晴るとき、若くは旭日昇るとき金箭を射ることの禁亂なる大観は、到底『歌人は坐がらにして名所を知る』的の杓子を以て規る可らず」と述べるのであるが、ここで言われていることと本文中の前注の引用との類似は、むしろ驚くほどであろう。そして、結論的に「實に山水は其普通名詞を描くことの難きにあらず、某の山、某の水と指れたる固有名詞を寫すことの難きなり」という仕方で主張される実証性の尊重も、趣旨としては、やはり同じものである。こうして「紀行文の死活を司る敘景の文句を用語辭によりて鹽梅するは、山水を型中に鑄るもの」でしかなく、そうして出来上がったものは、結局「一種鑄型の置物」にすぎないとまで批判する。(以上、第1巻329頁、330頁、333頁、334頁)

また、提喩(シネクドーク)、換喩(メトニミー)、明喩(シミリー)、張喩(ハイパーボール)、活喩(パーソニフィケーション)などの西欧流の修辭学用語を使ってみたり(336頁)、スペンサーの『文体論』に言及する(337頁)等、西欧的文章法を学んでいたことがうかがえる。

1902(明治35)年発表の『『三湖樓』を読む』においても、田村松魚の文章に見られる「叙景」の文体に関して、「それにしても支那と日本とは土地も違へば氣候も同じからず、李華の文の直に日本に轉用す可らざるの理」はあきらかだとして、漢文調の情景描写が陥りがちな欠陥を指摘している。

- 45) 『小島鳥水』112頁。ただし、このことば自体は1904(明治37)年に発表されたものである。
- 46) 「鎗ヶ嶽探險記」第4巻11頁

(いいだ・としほ 政治経済学部教授)